

題目 称賛行動にはコミットメント・シグナルとしての機能はあるのか？

～称賛者への評価に着目した比較社会生態学的検討～

氏名 松島保尚

指導教員 結城雅樹

私たちは日々の生活の中で、他者に称賛を送り、また他者に称賛を送られる場面によく遭遇する。では、なぜ私たちは日常生活の中で他者に称賛を送っているのだろうか。また、その称賛行動の適応価を左右していると考えられる称賛行動の社会的な機能および役割は一体何なのであろうか。

しかしながら、今現在対人関係上の称賛行動における心理学的な研究が乏しい現状にあることや、最近になり、ようやく称賛行動が対人関係上に与える心理学的な効果の研究が行われるようになってきたが、それは被称賛者側に注目した研究が多い。そのため、なぜ私たちは他者に称賛を送っているのか、また称賛行動の社会的な機能・役割に関しては未だ解明されておらず、上記の問いに答えるためには検討の余地が残されていた。

上記の先行研究の内容を鑑み、本研究では称賛行動の適応価を左右している称賛行動の対人関係上における社会的な機能・役割に関して注目し研究を行った。特に本研究では、特定の人へのみ称賛を送ることによって自身の望ましい人との間に排他的に関係を構築しようとする称賛行動のコミットメント表明機能の有無に着目し称賛者側に焦点を当てた社会間比較による研究を行った。

具体的には、関係流動性という社会環境要因の影響でコミットメント・シグナリング行動の有効性が異なる 2 つの国（アメリカと日本）において、称賛行動はコミットメントを表明する機能を有するという仮定のもと社会間比較を行った。

仮説は、日本に比べ関係流動性が高いアメリカでは、その社会環境特性のために他の代替関係へ移行するための代替可能性が多く存在する。そのため、自身がパートナーに裏切られるのではないかと不安を抱きやすい。そのような社会的環境では、自身にとって望ましいパートナーと関係を築くために特定の人へのみ称賛を送るような行動は、被称賛者にとって称賛者が自身との関係を望んでくれているのだという、上記の不安を解消するための強い安心材料になる。そのため日本に比べアメリカでコミットメント表明的な称賛者はより好まれるだろう。一方、アメリカに比べ、関係流動性が低い日本では、個人が既存の集団ネットワークの中に埋め込まれており、パートナーに裏切られ関係を解消されるという不安がアメリカに比べ生じにくい。むしろ排他的に関係を築こうとするコミットメント表明的な称賛行動というのは、集団

内の不和を生む可能性がある。そのため、日本ではアメリカに比べ特定の人にのみ称賛を送る行動はあまり好まれないだろうと予測した。

本研究では、上記の予測を研究するため、日本に住む人々とアメリカに住む人々を対象に質問紙による2つの調査を行った。

結果は、研究1では本研究の予測とは一貫した結果を得られず、コミットメント表明的な称賛者の選好度に日米差がみられなかった。また、関係流動性を説明変数とした媒介分析の結果、予測とは一貫せず、関係流動性が媒介しないもしくは関係流動性が媒介していたとしても予測とは逆に、関係流動性が高いと知覚している人ほどコミットメントを表明する称賛者をあまり好まない傾向も示していた。

研究1での問題点を修正し概念的追試を目的に行った研究2では、研究1とは異なり本研究の予測と一貫してアメリカ人の方が日本人よりもコミットメント表明的な称賛者をより好む傾向が示された。また研究2で被験者に尋ねた被称賛者の称賛者に対するコミットメント知覚項目において、日米両国でコミットメント表明的な称賛者が被称賛者からその関係にコミットメントを示していると思われる結果を示していた。しかし、関係流動性を説明変数とした媒介分析の結果、研究1と同様に予測とは一貫せず、関係流動性が媒介しないもしくは関係流動性が媒介していたとしても予測とは逆に、関係流動性が高いと知覚している人ほどコミットメントを表明する称賛者をあまり好まない傾向を示していた。また、日米両国において、コミットメントを表明するような称賛者は全体的な結果として中点（どちらともいえない）に選好度の平均値が示されていたことから、両国においてそのような称賛者はあまり好まれていないという結果も示していた。

上記の結果から、確かに媒介分析の結果において本研究の予測とは一貫せず、説明変数である関係流動性の間接効果は示されなかった。しかし、本研究の理論仮説と一貫して日本よりもアメリカにおいてコミットメントを表明する称賛者が好まれている結果を示していたことや、被称賛者の称賛者に対するコミットメント知覚項目において、日米両国でコミットメント表明的な称賛者が被称賛者からその関係にコミットメントを示していると思われることから、称賛行動にはコミットメント・シグナルとしての機能はあることが示唆された。しかし、全体的な結果としては日米両国でコミットメントを表明するような称賛者が好まれていないことから、ヒトの対人関係上でのコミットメント表明的な称賛行動の有効性はあまり高くないことも示唆された。そのため、称賛行動がヒト社会において頻繁に行われている理由はコミットメント・シグナリング機能以外の他の可能性に帰因しているだろうと考えられる。したがって、今後称賛行動の適応価および、その社会的な機能・役割を解明していくためにはコミットメント・シグナリング以外の他の機能に着目した研究が必要である。